

環境問題を
世界中の人たちが
「自分ごと」
で考えるには？

1班 五年 曾我真央
五年 曾我凜織
五年 立花茜

目次

1. わたしたちの考えるSDGsの目標について
2. この夏にわたしたちが行動したこと
 - ①知る・調べる
 - ・極地での活動が教えてくれること
 - 「地球の過去～未来」
 - 「生き物たち」
 - 「働く人たち」
 - 「伝える人たち」
 - ②課題を考える
 - 「情報はどこで知る？」
 - 「戦争や貧困」
 - ③解決方法のアイデアを考える
 - 「わたしたちがすぐできること」
 - 「大人にも協力してもらおう」
3. 感想・まとめ

1. わたしたちの考えるSDGsの目標について

地球の環境問題を「自分ごと」にして考えることができれば、みんなが地球の環境に気をつけて行動できるかもしれないと考えて、次の4つの目標について取り組んでみました。

13 気候変動に
具体的な対策を



達成目標13-3

気候変動が起きるスピードをゆるめたり、気候変動の影響に備えたり、影響を減らしたり、早くから警戒するための、教育や啓発をより良いものにし、人や組織の能力を高める。

14 海の豊かさを守ろう



達成目標14-1

2025年までに、海洋ごみや富栄養化など、特に陸上の人間の活動によるものをふくめ、あらゆる海の汚染をふせぎ、大きく減らす。

15 陸の豊かさも
守ろう



達成目標15-5

自然の生息地がおとろえることをおさえ、生物の多様性がそこなわれないうようにし、2020年までに、絶滅が心配されている生物を保護し、絶滅を防ぐため、緊急に対策をとる。

17 パートナースhipで
目標を達成しよう



達成目標17-17

さまざまなパートナーシップの経験などをもとにして、効果的な公的、官民、市民社会のパートナーシップをすすめる。

出典：公益財団法人日本ユニセフ協会

2. この夏にわたしたちが行動したこと

①知る・調べる

「地球の過去～未来」
「生き物たち」
「働く人たち」
「伝える人たち」

②課題を考える

「情報はどこで知る」
「戦争や貧困」

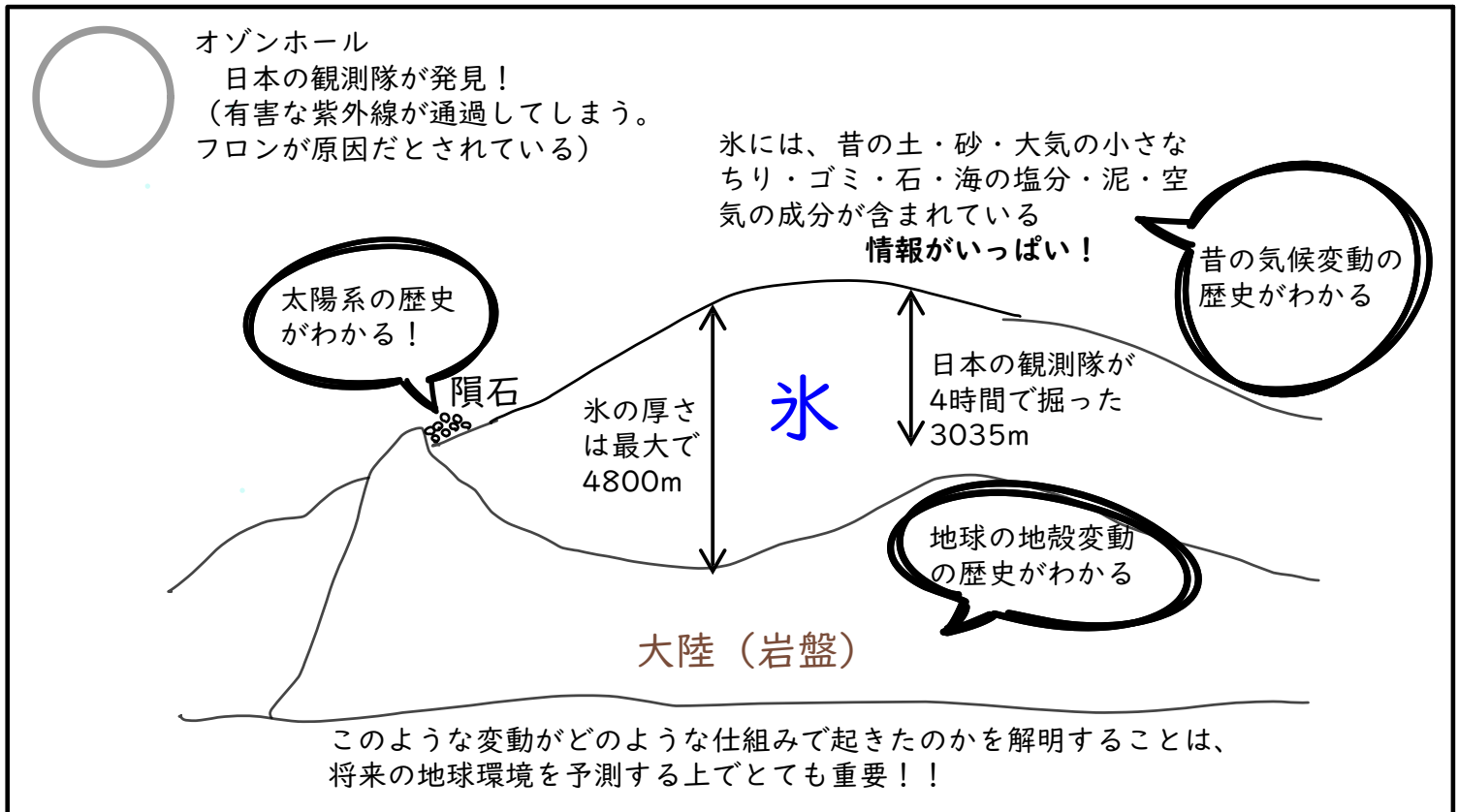
③解決方法の
アイデアを考える

「わたしたちがすぐできること」
「大人にも協力してもらおう」

2. この夏にわたしたちが行動したこと

①知る・調べる 極地での活動が教えてくれること「地球の過去～未来」

南極の深さ3035mまでの氷を掘り出したところ、一番下の氷は約72万年前の氷だった
⇒今は研究が進んでいるので、氷の中の空気の成分を調べることで、昔の温度やそのころの環境を知ることができるようになった。



⇒氷には昔の情報が詰まっていて過去から未来が見えてくる

①知る・調べる 極地での活動が教えてくれること「生き物たち」

【話し合ったこと】

「氷がとけて動物がおぼれたり、住む場所がなくなることがあるんじゃないかな。」

「二酸化炭素が増えて地球温暖化が進んでいるからだね。」

「ホッキョクグマなどは、氷がとけて困っているかもしれないね。」

「地球温暖化による気温の上昇で、北極などの寒冷地に生息している動物が絶滅しているそうだよ。絶滅危惧種に指定されている動物にはいるのかな。」

【調べたこと】

・北極の海氷はとけ続け、この50年で日本の国土の7倍以上の面積が減った。海氷は太陽の光を反しゃするが、海氷が減ると太陽の光を吸収する海水の面積が増え、水温が上がり、さらに海氷がとけて減るため温暖化が加速する。

出典：地球のためにできること②どうする？気候危機

・北極には多様な生き物が住んでいて、一種類の生き物だけでなく動物や植物、び生物といった生き物すべてが結びついた”生態系”という見方で研究することが重要。

・南極の夏に子育てを行うアデリーペンギンの数は、1970年代からの調査では、2010年までに約20～40%近く減っている。その原因はペンギンのえさとなるオキアミが減ったことによる。

出典：南極・北極から学ぶ地球の未来【基礎編】2024

・ホッキョクグマは凍った海の上でえ物をとり生活しているため、海氷が少なくなると、海をたくさん泳がなくてはならないためえ物がとりにくくなる。

出典：くらべてわかる地球のこと/中山由美

・2023年8月下旬、イギリスの研究者たちから、1万羽近くのコウテイペンギンのひなが死んだ可能性がある、という報告があった。温暖化の影響で、海水がいつもよりはやくとけてしまい、うぶ毛しか生えていないため海に入ることができないひなペンギンがおぼれてしまったか、雪から雨に変化したことで、うぶ毛がぬれてしまいごえ死んでしまったことが原因と考えられる。アメリカでは2022年に絶滅危惧種に指定された。

出典：南極・北極から学ぶ地球の未来【基礎編】2024

①知る・調べる 極地での活動が教えてくれること「働く人たち」

【話し合ったこと】

「極地（南極・北極）で働く人たちにはどんな人がいるんだろう？」

【調べたこと】

日本の**南極観測**は、昭和基地をベースに、それぞれの専門家の方々が、オーロラの観測や気象・大気・地震・重力・地形などの観測、厚い氷床の掘削、鉱物の調査や隕石の発見、動植物の調査などを行っている（観測系の仕事）。また、観測隊員が快適・安全に生活して観測活動が順調に行われるように、機械・通信ほかの整備を行う方や医師や調理技能士などの方々がいる（設営系の仕事）。観測を行うのは、夏の間3ヶ月間南極に滞在する夏隊（約60名）と、1年を通して南極に滞在する越冬隊（約30名）で、南極観測船「しらせ」は、これらの隊員を運ぶ仕事のほかに隊員たちの南極でのさまざまな活動を1年のうち5か月にわたって支援している。

出典：環境省_南極キッズホームページほか

北極には何千年も前からイヌイットと呼ばれる人たち（正式にはカラーリッ：グリーンランド人）が住んでいて、場所によっては学校や病院、老人ホームなどの施設もある。南極と比べて地球温暖化の影響がいち早くあらわれる場所だとわかってからは、北極観測が注目されるようになり、各国から研究者たちが集まっている。山崎哲秀さんという日本の犬ぞり探検家の方は、日本からの研究者のサポートをしたり、先住民族の伝統文化を守る活動をおこなっている。出典：ふしぎな北極のせかい_山崎哲秀

日本の海洋開発機構（JAMSTEC）は海洋地球研究船「みらい」をもって北極海で調査を行っている。現在は2025年3月の進水、2026年秋頃の完工・引渡しに向けて「みらいⅡ」を建造している。出典：海洋開発機構



南極観測船「しらせ」

出典：国立極地研究所



「みらいⅡ完成イメージ」

2. この夏にわたしたちが行動したこと

①知る・調べる 極地での活動が教えてくれること「伝える人たち」

【2024年9月19日に中山由美さんにインタビューすることができました！】



プロフィール：朝日新聞記者。45次南極観測越冬隊、51次夏隊、61次南極観測越冬隊に同行。北極はグリーンランドやスバルバル諸島、パタゴニアやヒマラヤの氷河も取材。2002年度新聞協会賞受賞の他、2012年には科学ジャーナリスト賞も受賞されている。

出典：北極と南極の「へえ〜」くらべてわかる地球のこと

質問1 「北極や南極で経験したことを通して私達にもっと知って欲しいこと、重要なことは何ですか。」

中山さん「南極と北極ってすごく特別なところを感じるけれど、実は地球のそのままの姿、人が手を加えてない本来の姿がそこにあるんですね。私たちが生活している空間というのは、家や工場を建てたり、車を走らせたり、自然や地球環境を変えてしまった空間なのです。地球には多種多様な生き物がいて人間もそれらの恩恵の中で生まれてきた生物のひとつであって人間だけが特別な生き物ではないことに気づかずにいる。「あれ変だな？」ということをもう一度考えさせてくれるような場所です。皆さんも想像して欲しいと思います。」

質問2 「北極南極で驚いたこと、新しい発見などがあったら教えてください。」

中山さん「南極に行くと自分の足の下に何万年とか何億年前の石があったり、宇宙から届いた隕石があったりします。また南極の氷の中には、古い地球の大気が残されていて、地球の歴史がわかります。地球の過去から現在までが見えて、さらに100年後には地球がどうなってしまうのだろうと考えさせられること、感じるができることにとても驚かされます。」

質問3 「中山さんが感じた北極や南極の魅力、良いところを教えてください。」

中山さん「太陽や雪、氷の表情が豊かなことです。かわいて吹雪になると痛いような雪があったり、温度の変化によって白っぽい氷が青く光るように見えたりします。東京の空を見上げても星はたくさんは見えないですね。南極に行くと空一面に星が見えて、これが本当の姿だ！星はこんなにも空に瞬いていたんだ！と気づくことができます。夏は真夜中になっても沈まない白夜があり、冬になると極夜といって太陽がのぼらない期間があります。昭和基地だと1ヶ月半もお日様の光がないのです。極夜が終わって太陽が出てきたときの、その光を見たときの感動は言葉では表せません。ほんのりした暖かい色の光は心の中まで安心感と温かみをもたらしてくれます。同じ場所に立っていても同じ景色には出会うことがないことも魅力です。」

質問4 「北極や南極の未来がどうなってほしいとお考えですか？」

中山さん「今の北極は、たいへんな勢いで温暖化が進んでいます。氷が溶けてしまえば生物も変わってくるしそこに元々住んでいた先住民の人たちの、例えばそのエスキモーの人たちとかの犬ぞりでの生活も変わります。獲れる獲物とか動物たちも変わります。もっと多くの氷がある南極でも、氷が溶け始めると海への影響が大きくなります。海が変われば、気候も変わって、結局、地球が全部変わってしまう。次の世代への責任ということを考えなくてはならないのです。人間だけの地球ではなくて、生きている生物たちみんなの地球であることをもう1回考えて、何とか変化を止めることができる未来になって欲しいと考えています。」

質問5 「直接見た北極や南極の様子を教えてください」

中山さん「南極だったらペンギンがいたり、北極だったら白クマとかアザラシがいたり、彼らの生きてきた世界に私達がふっと入って、そこを覗き見られるというのがとても興味深かったです。例えば南極で人間が生身の体でずっといたら一瞬で凍え死んでしまうところでも、ペンギンはしっかり子育てをしてたくましく餌を獲って生きている。彼らが生きてきた世界を人間が邪魔してはいけないな、壊したりしちゃいけないなと感じました。」

質問6 「なぜ北極や南極に行こうと思ったのですか。またなぜ興味をもったのですか。」

中山さん「元々アウトドアがとても好きでした。山に行ったり海に行ったりするのが好きだったし一人旅も好きでした。朝日新聞は南極観測隊を始めるときに応援した歴史があり、1956年に始まって一次隊とか二次隊、三次隊の時代には記者が同行していました。久しぶりに記者を出そうということで『行かないか?』と言われて、『え?いけるんですか?』というところから始まりました。何も知らずに向かい、実際に行ってみたら本当に勉強になったし楽しかったしいろんな経験ができたので、帰ってきてたくさん講演をしました。講演で南極の話をしていたら北極にも行きたくなくなって企画案を出して北極に行きました。北極に行ったらまた南極に行きたくなり、また企画案を出して行きました。そういうのをずっと繰り返しています。」

質問7 「極地で命をかけて働いている人たちのことや中山さんが考える未来を良くするヒントについて私達にできることがないかについてご意見を聞きたいです。例えば天気情報などのような生活の中でいつも目にするようなアプリがあったら、もっと多くの人が環境危機問題を自分ごととして考えることができるのではないかと考えたりしています。アクセスすることで北極や南極の情報を知ることができる、情報を見るだけで募金ができる、参加している人数が一目でわかるような工夫があるなど、たくさんの人に使ってもらうためには、ほかにどんな工夫があると良いと思いますか?」

中山さん「今はインターネットが通じて通信速度も速くなって動画で会話ができるようになってきたので、これからの日本とか世界を担っていく若い人たちが興味を持っていつでも南極にいる人たちと繋がることができ、今日はどんなお仕事してるの?とか今の天気はどうですか?ということが気軽に聞けたりできると互いに近くに感じられると思います。観測隊員さんたちは、仕事があっけなくずっと繋がってるわけにはいけないので、私みたいなメディアの人間とかが窓口になってきたら本当にいいなと思います。毎週何曜日にお喋りしましょうとか、みんなで集まって会議したりね。あと、こんなことを南極でやってみたらどうなんでしょうとか、南極ではこんなのはどうなってるんですかみたいな事ってふっと思いつくこととかありますよね。そのときにじゃあこっちでやってみましょうとか、両方でね、疑問とか質問とか提案とか、やり取りが気軽にできるようなラインがあるといいですね。極地での出来事とか変化を捉えることは、地球環境が大変になってきている時だからこそ、今まで以上にたくさんの人に関心を持って欲しいです。そういうアプリとか、提案を皆さんから極地研とか観測隊に提言してくれると嬉しいです。」

質問8 「極地での生活で大変だったことは何ですか?大変だけど感動したことはありますか?」

中山さん「ものすごい吹雪だとかマイナス30、40度の環境は行かないと体で感じられません。この経験があると、辛い環境でふんばったということを後で振り返ることができます。今の昭和基地はとても快適で、部屋の中は暖かいしご飯も美味しく、トイレやお風呂も綺麗なのですが、短いときは数日、内陸の方に行くと1ヶ月とか2ヶ月とかを基地でない野外で生活しなければならぬ時があります。その時は、雪上車の中で寝てご飯を食べてまた移動する暮らしになり、その間はトイレをするのも大変です。いろんな人たちがいるからぶつかることもあるしうまくいかないこともたくさんあります。でも極地では1人じゃ絶対生きていけないし、生活してはいけないし、仕事もできない。みんなが自分の仕事だけをやっていてはやり遂げることができなくて、全員が自分の仕事の何倍ものことを隊のために力を合わせてやらなくてはなりません。そこが一番大変なのですが、お互いに助け合えること、助けられたり励まされたりしたときの嬉しさは経験してみないと得られません。」

質問9 「本やニュースではわからないことの中で一番伝えたいことは何か教えてください。」

中山さん 「今はたくさんの情報があって画像も高精度になっているので、足を運ばなくても『知っている』気がしますよね。でも、その場所に行って実際に目で見てその壮大な世界に入ってみないと見えてこないものってあるのです。例えばオーロラ。頭の上をワッと走り回るような光がオーロラなんです。みなさんの身の回りのことも同じです。ネットで調べればすぐ答えが出てきます。そうではなく実際に行ってやってみる。得られるものはきっと違うはずですよ。」

質問10 「SDGs的に持続可能な社会に向けて、また、温暖化や地球環境に向けて、子供たちができることやこんな事を気にしていくと良いよという事はありますか。(先生からの質問)」

中山さん 「『あなたたちが残した課題を私たちが受け継ぐのですよ。』と言って大人に向かってもっと大胆に切り込んでいい気がします。大人たちは、温暖化が大変だとかエネルギーをどうかしなければと言いながら、実際のところは、まだまだ目先のお金のことを考えたり、自分たちが快適なこと考えていると思います。皆さんがそこをビシバシ批判していいと思うんです。」

質問11 「中山さんからこちらに聞きたいことはありますか。(先生からの質問)」

中山さん 「アプリはどんなものを考えてるんでしょうか？」

立花 「温暖化を止める活動をすると氷の面積が増えるような仕組みのアプリを考えています。」

中山さん 「それは手を打たないとどんどん大変な方になっちゃう。頑張っってそうならないように守らなきゃみたいな感じなのかな。いいですね。やっぱりそういうところから小さい子からもだんだん興味を持ったりしながら入り込めるといいなと思います。」

まとめ 中山さん 「温暖化の問題とか地球とかって言われるとひとりで何かできることはあるのかしらと思ってしまうけれど、一人一人がやらないことには何も始まらないと思います。」

曾我(真) 「授業で習ったときはあまり深く考えることはなかったのですが、こうしてコンテストのために調べてみると、自分ごととして考えることが大事だなと思いました。」

中山さん 「『あの遠い知らないところの世界』じゃなくて、全部繋がっているという意識を持つことはとても大事だと思います！」 曾我(凛) 「東京で見ている空の本当の姿を、私も見てみたいと思いました。」 中山さん 「将来、是非、南極や北極に行ってください！」

立花 「温暖化の実態を今日のインタビューでより深く知ることができました。」

中山さん 「北極は、少し前までは2倍の速度で温暖化が進んでるという話だったのが、最近は3倍4倍の速度で進んでいると言われて本当に深刻になってきています。昔は南極はとても寒いから簡単に氷は解けませんなどと言っていたのに、さすがに南極でもすこしずつ氷が溶け始めています。こんなふうにとどんどん安心できない不安な要素が増えてきてしまいました。皆さんの世代で何とか。皆さんの力で何とか地球の未来を変えてほしいです！」

⇒中山さんのような伝える人たちのことを、多くの人に知ってほしい！



10月14日に中山さんの講演会『南極と北極から地球がみえる』に3人で参加させていただきました。南極や北極についてより知ることができました。また「みんなの宝を大切に・争いのもとになるものはやめよう」という南極条約※についてのお話が心に残りました。※南極地域の平和的利用、科学的調査の自由と協力、南極地域における領土権主張の凍結



4人で記念撮影。
ありがとうございました！

2. この夏にわたしたちが行動したこと

②課題を考える 情報はどこで知る？

【考えてみたこと】

「テレビや新聞にはたくさんの情報が載っているけれど、極地の話はあまり見たことがないと思う。」 「わたしたちは学校の自由研究がきっかけで、調べたり考えたりしているけれど、大人や高齢者はどうやって知ることができるのかな。」

【調べたこと】

国が令和5年7月に行った『気候変動に関する世論調査』によると、気候変動に関心がある」と答えた人は全体の89.4%いたのに対し、脱炭素社会の実現に向けた取組を積極的に行いたいと答えた人25.1%しかいなかった。その理由として、「地球温暖化への対策としてどれだけ効果があるのかわからないから」が47.5%、「どのような基準で選択し、どのように取り組めばよいか情報が不足しているから」が30.3%を占めていた。

選択肢 (○はいくつでも)	調査日		増減
	令和2年11月	令和5年7月	
地球温暖化への対策としてどれだけ効果があるのかわからないから	48.4%	47.5%	-0.9%
どのような基準で選択し、どのように取り組めばよいか情報が不足しているから	45.2%	30.3%	-14.9%
日常生活の中で常に意識して行動するのが難しいから	27.8%	27.9%	0.1%
手間が掛かるから	18.3%	23.8%	5.5%
経済的なコストが掛かるから	19.0%	21.3%	2.3%
地球温暖化への対策のための取組を行う必要性を感じないから	15.1%	14.8%	-0.3%

出典：内閣府_世論調査

⇒気候変動に関心があるのに行動を起こせないでいる人たちがいる。
解決手段を考える必要があるのではないかな。

②課題を考える 貧困や戦争

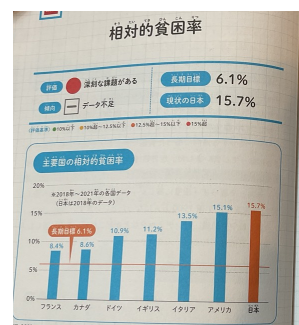
【考えてみたこと】

「国と国との戦争だけではなくて、世界中で紛争や対立がおきているよね。そこでくらす人たちは環境のことを考えられないんじゃないかな。」

【調べてみたこと】

戦争や紛争がない日本でも、2019年に行われた国民生活基礎調査によると、冷蔵庫や暖房器具が買えない、学校の制服代や給食費が払えないなど、ほとんどの人が持っているものを持ってない状況をあらわす相対的貧困率※が15.7%もある。

※相対的貧困率…衣食住に困る状況である「絶対的貧困」とは異なり、その国・地域の大多数の人よりもまずしい状態のことをいう



出典：こどもSDGs達成レポート

世界には今この瞬間も家族とのきずなを失っている人たちがいる。日本でも毎日の生活に精いっぱい自分たちの未来を考えることができない人たちがいる。⇒わたしたちができることから行動しよう！！

2. この夏にわたしたちが行動したこと

③解決方法のアイデアを考える 「わたしたちがすぐできること」

【考えてみたこと】

- できることレベル1：寝転がっていてもできること 寝転がりながらスマホを見るときは環境にやさしい企業を検索して、買い物するときの参考にする。
- できることレベル2：家にいてもできること 節電と節水。
- できることレベル3：外出先でもできること エコバッグを持参。移動は徒歩か自転車 遠出する時はバスか電車。

⇒自分ごととしてSDGsを考えることが大事

③解決方法のアイデアを考える 「大人にも協力してもらおう」

【祖母へのインタビュー】

質問「毎日見たり聞いたり読んだりしているものはなに？」

祖母「テレビや新聞、ご近所情報がわかるメールかしら。」

質問「普段はどんなことをして過ごしているの？」

祖母「地域をまとめるセンターがあって、お友達と、食育の会とか歩こう会というイベントに参加しているよ。小学校にミシンを教えに行く活動もしていたわ。」

【おとなへのインタビュー その1】

質問「南極や北極について、新聞やテレビで見かけることはある？」

大人1「あまりないかな。自分から興味をもって調べないと知らないままかもね。」

【おとなへのインタビュー その2】

質問「毎日の生活で環境問題解決のために取り組んでいることはある？」

大人2「たとえば電気。毎日の使用量がわかるアプリを使うようになってからは、なるべくエネルギーを使わないように気をつけるようになったわ。ガスは月に1回だけど、インターネットで使用料を確認するだけでポイントがたまるとのよ。」

【考えたこと】

- できたらいいなレベル：市役所や区役所に協力してもらおう～地域とつなぐ～
高齢者の地域でのくらしを支える場所をつくっている人たちに、健康のサポートだけでなく地球環境について考えたり活動するイベントを計画してもらおう。
- できたらうれしいレベル：テレビ局や新聞社に協力してもらおう～極地とつなぐ～
天気情報のように見る人の多いコーナーで、「今日の南極」のような情報を伝えてもらう。新聞には、天声人語のように、毎日、地球環境に関する記事を載せてもらう。
- できたら最高レベル：企業に協力してもらおう～行動の輪をひろげる～
こどもから高齢者まですべての人が楽しく参加できて、環境問題を解決するための行動が起こせるようなアプリを一緒に考えてもらう。

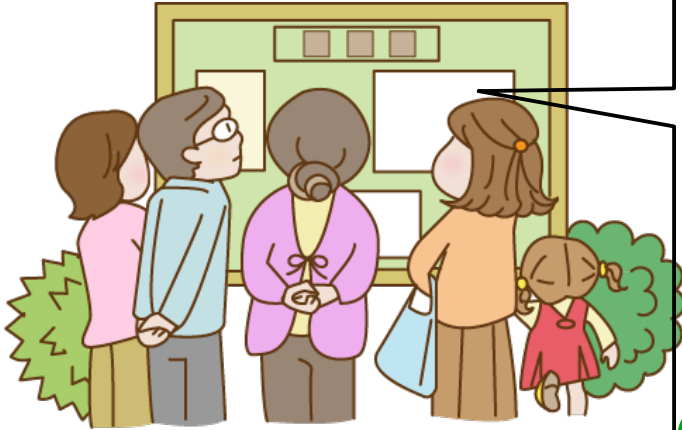
⇒ひとりひとりの力は小さくても、

みんなが協力し合って地球の未来のために行動する

【イメージ図】

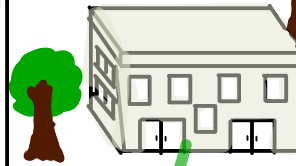
●できたらいいなレベル：市役所や区役所に協力してもらおう～地域とつなぐ～

地域の掲示板で知らせる



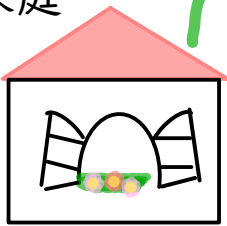
区民センター・図書館

ワークショップ
「みんなで考える地球の未来」



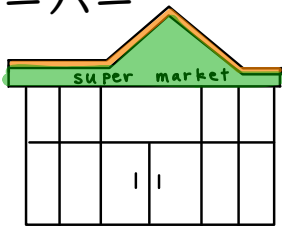
コーナーを作って情報を発信したり、ワークショップでより多くの人に知ってもらおう。

家庭



意識調査をして、興味や関心をもってもらおう。

スーパー

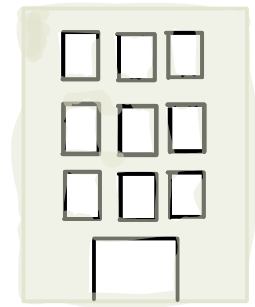


リサイクル回収コーナーに環境ポスターを貼ってもらおう。
リサイクル活動をした人向けのQRコードをつくってもらおう。



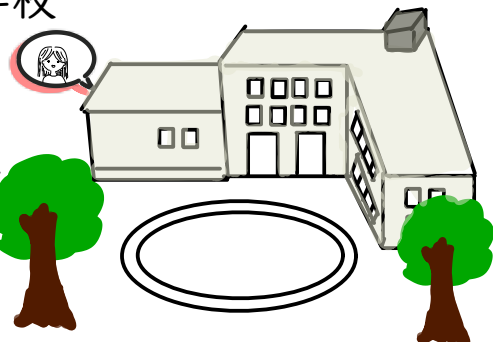
市役所・区役所

会社



地域清掃活動などへの参加を呼びかけたり、その活動をまちの広報誌などで紹介してもらおう。

学校



先生が観測隊に同行したり、将来の活躍の場として極地で働く人たちのことを、子どもたちに紹介してもらおう。

【イメージ図】

●できたらうれしいレベル：テレビ局や新聞社に協力してもらおう～極地とつなぐ～

北極

- ・面積は約1,400万km²（ほとんどが海）
- ・北極海を囲んで8か国が領土を持つ
- ・それぞれの研究グループが様々な研究や観測を行っている
＝国際共同観測がさかん

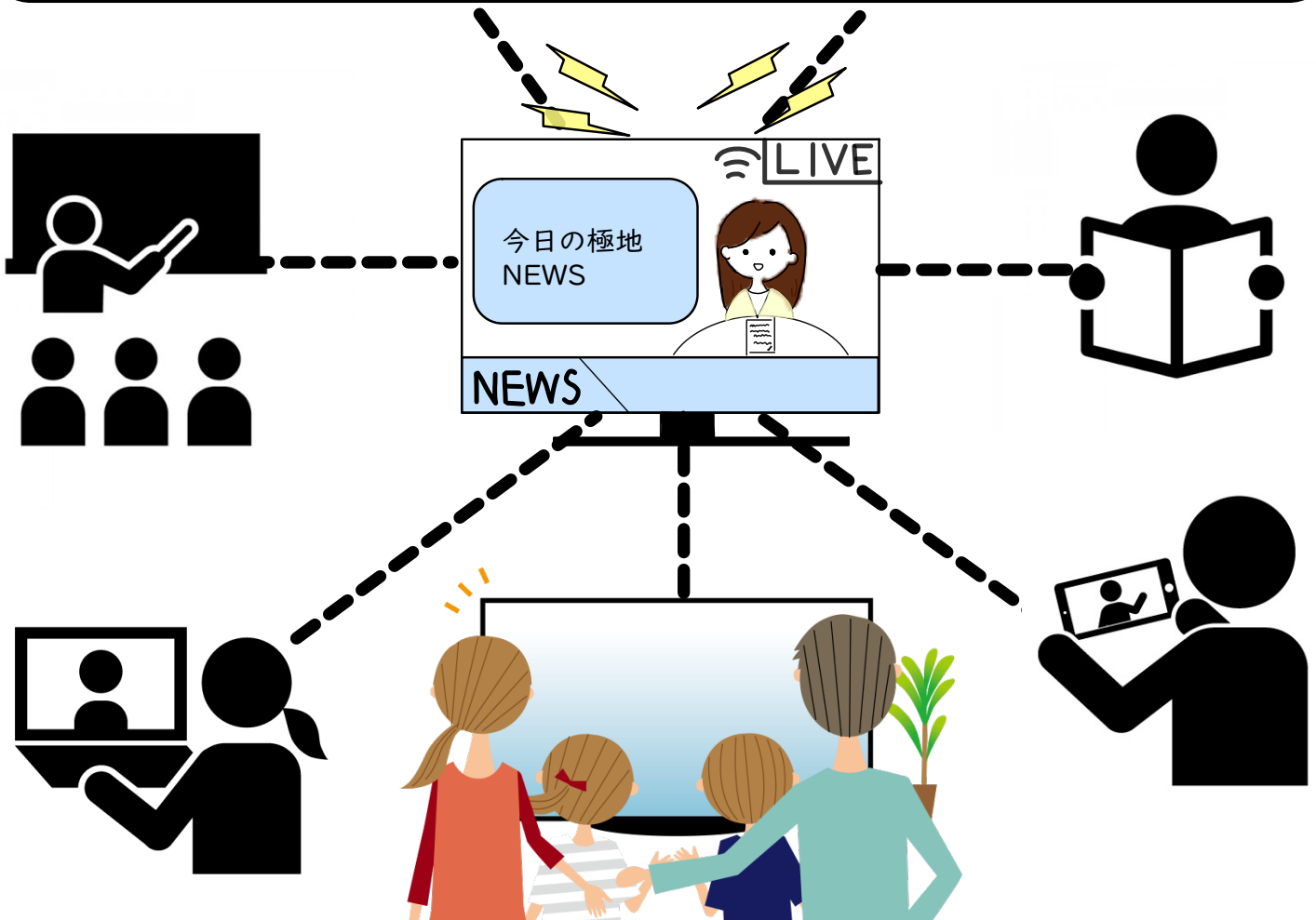


南極

- ・面積は北極海とほぼ同じ
- ・どこの国の領土でもない
- ・日本は4つの基地を持っている
- ・昭和基地には観測隊がいて地球の環境変動を調べている



出典：国立極地研究所・環境省_南極キッズホームページ・ぶよお堂



発信する内容のアイディアは次の頁へ

【イメージ図】

●できたらうれしいレベル：テレビ局や新聞社に協力してもらおう～極地とつなぐ～

①隊員〇〇さんの「今日のミッション」



⑤なんでも相談&質問&実験コーナー
「(例) これを極地でやってみたら…」

Q 南極ではいた息が白くなる場所※はありますか？

A 雪上車から出る排気ガスの近くで実験してみよう！



現地リポーター

※息をはいたときに、空気中にエアロゾル粒子がなければ水滴ができないため、空気のきれいな南極では、はいた息が白くならない

②「いまこれが流行っています」



③「今日の食卓」

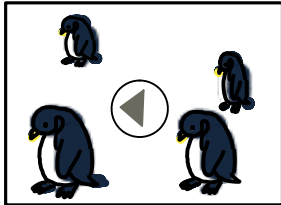


⑥今日の夜空紹介「オーロラや星空を中継」



④「いまこの生き物のことを知ってほしいコーナー」

ペンギンたちが子育ての季節に入りましたよ！

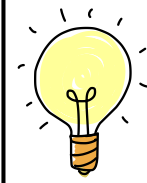


今年の海水の状態はどうですか？



現地リポーター

⑦メディアの方からの「ストップ温暖化！今の季節のワンポイント講座」



(例) サーキュレーターを置く場所を変えるだけで、エアコンの効きが良くなります！
たとえばこの部屋のこの位置にエアコンがある時は…

(お金をかけずに取り組める工夫などを紹介する)

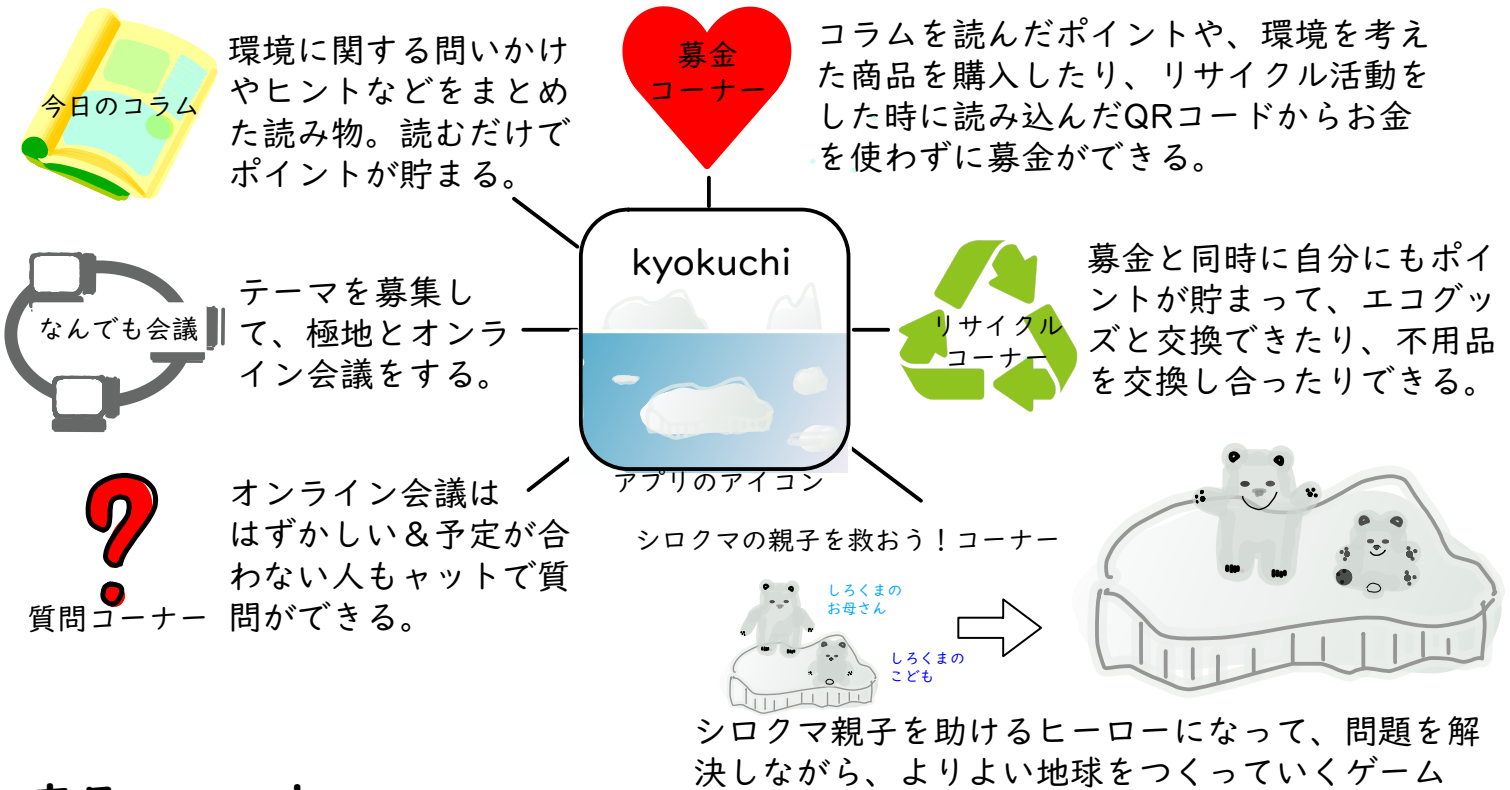
出典：日本極地研究所・国立極地研究所

毎日目にするツールでリアルタイムでお互いに情報を交かんする

【イメージ図】

●できたら最高レベル：企業に協力してもらおう～行動の輪をひろげる～

アプリの開発 極地とすぐにつながることができるアプリ。簡単に利用できて楽しく使いながら地球温暖化への対策に取り組むことができる



商品への工夫



紙パックの卵



トレーを使わないで売られている肉

プラスチックの包装から環境にやさしい素材に変える研究をもっと進めてもらう。環境を考えた商品は中身も高級品が多く値段が高い（例：紙パックの卵は378円/10個入、プラスチックパックの卵は324円/10個入）が、わたしの家で利用している肉屋ではプラスチックの容器を使わない商品が「お買い得品」としてトレーを使った肉より安価で売られている。このように生産者や販売者の意識が変わると、消費者である私たちも無理をすることなく温暖化対策に参加できる。

こどもから大人まで楽しく参加できて、
いま地球に何が起きているかを知ることができて、
ひとりひとりが温暖化を止めるための行動までつなげる
ことができたなら、未来は良い方向に変わるかもしれない。
『もっと身近に』『自分事として』考えられるアプリでつなぐ

3. 感想・まとめ

私は、地球温暖化がどれだけ深刻かどうかを知らなかったし、あまり気にしていませんでした。こうしてコンテストをとおして自分で調べたり、チームのみんなで考えたり、専門家にインタビューすることで北極や南極の氷がものすごいスピードで溶けていることだとか、動物たちの住む場所がなくなっていることなどを詳しく知ることができました。

それに、調べていくうちに、だんだんと地球温暖化やSDGsについての自分の意見を持つことができました。私が一番大事だと思っていることは、地球温暖化などの問題を一人一人が自分ごととして考え、それに対する自分ができる行動をとることです。そして、地球温暖化について自分で調べて、今現在の地球の様子を知ることが、何より大切だと思います。私もまだ知らないことが多いので、これからも自分で調べるなどして、もっと詳しく知ることができたらいいなと思っています。(曾我真央)

私は、こうしてコンテストのために北極や南極の事について調べたりする事で、南極や北極に興味を持ちました。そして私たちが普段考えないような地球環境の問題など、様々なことを、このコンテストを通じて少しだけわかってきた気がします。南極は寒いからまだ地球温暖化の影響は少しだけと思っていましたが、インタビューで中山由美さんが「すごい速さで進んでいる」とおっしゃっていて、びっくりしました。そして南極にも北極にもたくさん行かれていますのでインタビューできるだけでもとても貴重な体験をしていると思います。そして、インタビューをして終わりではなくたくさんの人に今北極や南極がどのような状態かを知ってほしいです。私もまだまだ知らないことの方が全然多いのもっと少しずつ知っていきたいです。そして中山さんがおっしゃっていた「これからの未来は、今の子供達にかかっている」という言葉が一番心に残りました。私も、いろんな事を心がけながら過ごしていきたいです。(曾我凜織)

これまで温暖化について深く考えたことはありませんでした。南極の氷にはたくさんの情報が詰まっていて、氷を調べることで未来まで予測できるということを初めて知りました。インタビューで中山さんがおっしゃっていた「人間だけが特別な生き物ではないことに気づかずにいる。生物たちみんなの地球。一人一人が温暖化を止めるために行動しないことには何も始まらない。」というお言葉から、このままでは未来が大変なことになると強く感じました。そして、大人も専門の人でない限りよく知らないのではないかと、という疑問にたどりつきました。この問題を解決するためには、より多くの人に「自分ごと」として行動を起こしてもらう事が何より必要だと考えて、大人にも協力してもらいながら、知る・考える・行動する活動を広めていく仕組みを考えてみました。私たちの未来は私たちが変えていきます。(立花茜)